

# 富士山と紀元二千六百年奉祝事業

松本武彦

## 目次

はじめに

一 富士山における奉祝事業

二 浅間信仰と奉祝事業

三 奉祝国民歌「紀元二千六百年」の制作

四 植民地朝鮮における富士山

むすびにかえて——何が賛美されたか

「君、不二山を翻訳して見た事がありますか」と意外な質問を放たれた。

「翻訳とは……」

「自然を翻訳すると、みんな人間に化けて仕舞うから面白い。

崇高だとか、偉大だとか、雄壮だとか」

三四郎は翻訳の意味を了した。

夏目漱石『三四郎』より

はじめに

一九四〇（昭和十五）年を中心とその前後数年にわたっておこなわれた、いわゆる紀元二千六百年奉祝事業について、史料およびその概要については、山梨における事業内容の特質とその意義を考察するなかで、すでに触れたことがある。<sup>(1)</sup>

本稿は、この事業全体のなかで、日本の象徴と認識されて当時既に久しい状況にあった富士山が、どのような位置づけを与えられていたかを検討する。

事業についての政府の公式記録といえる一九四三年刊行の『紀元二千六百年祝典記録』は、全一三冊中の「第七冊 第十三輯 奉祝記念事業」以下で、いわば国直営の事業である「紀元二千六百年奉祝会施行ノ事業」、宮内省・大蔵省・陸軍省・司法省・文部省等々個々の官庁における事業、そのほかの内外各地における事業の三者に分類して、事業主体や事業の概要を記録している。「政府の公式記録」というこの史料は、言うまでもなくその網羅性という観点からは、他にこれに勝るものが無い。しかし一方で、後述のように、「公式記録」という他に無い特質が、かえって「記録」から漏れる事業を生んだこともまた事実である。

富士山に限らず、奉祝事業のなかで山岳に関連する事業は、官庁においては文部省および通信省関係事業のなかで、神戸高等商船学校、鳥羽商船学校、岐阜薬学専門学校報国隊の生徒や鹿児島貯金支局、美濃特定局長会によっておこなわれた。<sup>(2)</sup>

神戸高等商船学校では、前日の「紀元二千六百年奉祝式」に引き続き、一九四〇（昭和十五）年十一月十一日午前八時校庭に参集し六甲山に登山した。参加人員約七〇〇名は、午前十一時山頂の楠木正成像の前に整列して「宮城遥拝」、「紀元二千六百年頌歌斉唱」、「万歳奉唱」をおこなった。

鳥羽商船学校は、十一月十日講堂で「奉祝式」をおこない翌十一日午前六時「飯野」登山を挙行した。山頂で日の出を拝し「聖寿万歳奉唱」などのうち六時五十分下山。午後二時からは講堂で東京での奉祝会のラジオの実況中継を聞くなどした。参加者は約六〇〇名であった。

岐阜薬学専門学校報国隊は、十一日、「紀元二千六百年奉祝報国団」が、「各班對抗金華山登山競走会」をおこなった。頂上において「宮城遥拝」、「万歳奉唱」および順位別に表彰をおこなった。実施に要した経費は四一円。参加人員は三九〇名を数えた。

一方、鹿児島貯金支局は、十一月十日、局内で「奉祝式」を挙行した後、職員有志約三五名で「城山」に登山競走をおこなった。山頂では「宮城遥拝」、「万歳奉唱」のほか「佳年」を奉唱した。「奉祝式」も含め経費として九円を要した。

美濃特定局長会では、八月十二・十三日の二日間にあつて局員の心身鍛錬を目的として伊吹山に登山をおこなった。十三日午前五時頂上で「宮城遥拝」、「万歳奉唱」して下山。経費四二円、参加者四五名であった。

奉祝事業とは関係なく、富士登山そのものは、その登山者数から、戦前の一ピークを迎えていた。<sup>3)</sup>山梨県側吉田口のみの数値であるが、昭和初年一九二〇年代末ごろから昭和十五年一九三九年までその数は増加傾向にはあつたが一〇万を超えることはなかった。しかし紀元二千六百年にあたる一九四〇年昭和十五年には、一〇万八五八三名

となった。この年以後一〇万を超えるのは、対米戦争開戦の一九四二年、一九万七四一三名。翌一九四三年も八月二六日までの数値で八万七三二二名であったから、いわゆる夏山期間が終末を迎える八月末日までには一〇万を超えたかもしれない。

いづれにしても紀元二千六百年奉祝の年である一九四〇（昭和十五年）年、人々はそれ以前に増して富士につめかけた。七月二十日から二十一日にかけて吉田口からの登山者は一万名を突破し、新聞はその様子を「殺人的大賑い」、「富士は人山」と評した<sup>(4)</sup>。

政府の公式記録に拠れば、奉祝事業の中で登山は必ずしも多数を占めていたと言いがたいが、富士に限れば、紀元二千六百年の年に人々はそれ以前をはるかに上回る数で登山道を埋め尽くした。

#### 一 富士山における奉祝事業

奉祝事業として一九三八（昭和十三）年から一九四一年にかけておこなわれた行事は、日本内地において行事数一万八四〇件、総経費九〇二万九二六八円、参加総員四三九三万七一一四三名。外地で一六一四件、二七万三八二一円、四八〇万九六四六名。海外でも三六八件、二三万九〇二五円、六七万七一一七四人であった<sup>(5)</sup>。この件数や経費の金額は報告漏れなどもあわせればさらに変動し、また、基本史料である『紀元二千六百年祝典記録』は経費二万円以上、参加者二万名を越える行事、およびその趣旨において特に重視すべき「主要行事」を記録したもので必ずしも網羅的な記録ではないことは、記録の作成者自身が認めているから、実際はこれ以上の規模で行われたことにな

ちがない。

以上のような史料の限界を踏まえた上で、まず、富士山の山体ないしは山麓において行事をおこなったものには、以下のような事業があった。

一九四〇（昭和十五）年七月二十五日、読売新聞社社会事業部は経費一万三〇〇〇円で富士山頂に「歌燈籠」を建立した。<sup>(7)</sup> そもそもこの燈籠は、檀原神宮に奉獻するための奉祝「讃歌」を一月一日から同二十五日まで読売新聞紙上で一般に公募し、三万三三九八首の応募を得、これらのうち千葉胤明、佐々木信綱、齋藤茂吉、北原白秋らが選者として選んだ数首を伊東忠太設計の石燈籠に刻んだもので、「官幣大社浅間神社」に奉納して、最終的には二基あわせて約一〇〇〇貫（三七五〇キログラム）を山頂まで運び上げて奥宮に奉納したものであった。<sup>(8)</sup> 山頂の浅間神社奥宮で執行された奉告祭では、読売新聞社関係者一七〇名、一般登山者七〇〇〇名が見守るなか富士宮の浅間神社本殿から運ばれた聖火が燈籠に灯され、読売新聞社はこの日を記念して一般登山者からの手紙を鳩を使って送信するサービスをおこなって、盛況を極めた。<sup>(9)</sup> また、歌燈籠の建立を記念して同社が主催した富士登山団は、二十五日、吉田口より登山した。<sup>(10)</sup>

そのほかに読売新聞社は、同年の夏季に富士山をはじめ立山、大菩薩峠などに「風景指示盤」をも建設したとされる。<sup>(11)</sup>

七月二十六・二十七日には、経費一万五五〇〇円をかけて「紀元二千六百年記念富士山頂全国青年大会」が開催された。<sup>(12)</sup> 静岡市に発行所を置く静岡新報社および静岡県青年団が主催、大日本青年団および浅間神社が所在する当時の大宮町が後援して、まず、二十六日に、全国からの青年団員代表六〇〇名が浅間神社に集合、参拝し、町内を

大宮町小学校まで行進して同校で「宮城の遙拝」、大日本青年団関係者や静岡県関係者の訓示、静岡県青年団長および静岡新報社長の挨拶、四王天陸軍中將の講演「世界情勢の転換と皇国の進路」の後、大宮町主催の歓迎会をうけて各所に分宿した。<sup>(13)</sup>静岡新報社長は富士山をサムライとともに「日本の象徴」であると、これを「日本精神、皇道精神の象徴」と同じであるとしつつ、富士登山が何事も考えない無私の境地においておこなわれる点で、「君国に一命を捧げたる戦場」での心境と同じだとしている。<sup>(14)</sup>また、知事の訓示は、七月二十七日が東宮時代に天皇が富士山に登頂した日であることを紹介し、「富士の霊峰が莊嚴なる我国家の象徴として万邦無比の霊山たる事は申すまでもありません」<sup>(15)</sup>としている。翌二十七日、午前三時に浅間神社に集合、富士登山を開始し、午後一時から山頂で休憩の後、二時三〇分国旗を掲揚し、浅間神社奥宮前で国威宣揚の祈願祭をおこない、さらに宮内大臣宛に「天機並御機嫌奉伺文」を打電するなどし、「国家総力体制の強化拡充に協力し敢然として聖戦目的完遂に邁進せざるべからず」との宣言を行って三時過ぎ山上で解散した。<sup>(16)</sup>

『静岡新報』は、登山の様子を伝書鳩をつかって詳細に報道した。<sup>(17)</sup>加えて、二十七日から二十八日の紙面には、当時の富士郡内各町村の町村長、助役、収入役の連名によるものをはじめとして、銀行、電力会社、製紙会社など民間会社、信用組合の連合会や旅館業の組合など業界団体、郡の教育会、芸妓組合、医者、小学校校長等々、地域の多方面にわたる広告主によって、大会の開催を祝う広告が掲載されている。<sup>(18)</sup>

八月十五日、「紀元二千六百年奉祝全日本帆走飛行競技大会」が富士山中腹の宝永山でおこなわれた。<sup>(19)</sup>同大会は、帝国飛行協会ならびに大日本帆走飛行連盟が主催し、文部省、厚生省、通信省の後援で開催されたもので、山梨県甲府市西郊の玉幡にある陸軍甲府飛行場に置かれた山梨航空技術学校嘱託教士の小田一級滑空士が、それまでの記

録を大幅に更新する七二キロメートルを飛んで第一位となった。<sup>(20)</sup> この結果をうけて、山梨航空技術学校では、グライダー部の新設やグライダー学校の併設を検討したという。<sup>(21)</sup>

北麓の山中湖畔で、大日本少年団連盟が主催して、二つの事業がおこなわれた。ひとつは湖畔の旭ヶ丘に「健児心身修練ノ道場」として丸太造寮舎の建設がなされ、もうひとつは団員や指導者の有志の寄付で「守護神祠」が建立された。<sup>(22)</sup> 祠の鎮座式は十二月十二日正午から挙行され、連盟本部から理事や部長が出席したほか、山中湖の地元関係者十数名が臨席した。<sup>(23)</sup> 建設にあたっておこなわれた寄付は、個人による献金のほかに、内地各地の地方連盟は言うに及ばず、台湾高雄市高津少年少女団や同じく台湾の屏東郡連合少年団にまで及んだ。<sup>(24)</sup>

## 二 浅間信仰と奉祝事業

いわゆる浅間信仰と富士山との関係を想起すれば、紀元二千六百年の奉祝事業としてなされた、当時の静岡県富士郡大宮町（現 富士宮市）の浅間神社や全国各地に多数存在した大小の浅間神社への参拝なども、富士に関わる奉祝事業のひとつと言えよう。そもそも富士山と浅間神社の関係は、信仰対象とこれを祀る祠堂との関係であって、富士山ないしその象徴たとえばコノハナサクヤヒメを祀る神社である浅間神社に詣でることが、すなわち富士信仰の具体的表現となった。<sup>(25)</sup>

さまざまな祭神の神社への参拝は、奉祝事業全体で六〇一件、総経費二一萬二八一二円、参加人員一一七万四四三名であったが、浅間神社への参拝などに限定すると、静岡県下の浅間神社に関係するもの九件、山梨県下の浅間

神社に関係するもの二件であった。<sup>(27)</sup>静岡県の九件の具体的内容は以下の通り。当時の富士郡鷹岡町入山瀬久保区の浅間神社境内に榊二本が一九四〇年に経費一〇円で植樹された。一九四〇年の何月であったかは不明である。さらに当時の庵原郡内房村の浅間神社では、六月一日に経費四〇円をかけて小学生を初め村民四〇〇名が参加し「銃後奉公祈誓大会」を開催した。当時の富士郡傳法村では、東京で奉祝会が開かれたのと同じの十一月一日、同村の浅間神社で参加人員五〇〇名、二〇円の総経費で奉祝式典を開催した。同式典には、傳法小学校児童四名が参加して浦安の舞を奉納した。静岡市内の五つの小学校では、大里西、城内西、駒形、一番町の四校が十一月十日、安東小学校が十一月十一日にそれぞれ浅間神社に参拝した。参加人員は総計五五〇〇名を超えた。一方、山梨県内の浅間神社で紀元二千六百年の奉祝事業がなされたのは、当時の南巨摩郡万沢村で経費五〇円をかけ一四〇〇名が参加して奉祝式が開かれたほか、当時の東八代郡一宮村で一七〇〇名が参加し三〇円の経費を使って浅間神社参拝などがおこなわれた。

六月十九日に庵原郡内房村の浅間神社でおこなわれた「銃後奉公祈誓大会」は、実は全国で四一七件、総経費一三万三一九二円、総参加人員五三万七九一八名を集めて開催された「祈願宣誓式」のひとつでもあった。<sup>(28)</sup>そもそも静岡では静岡市銃後奉公会が静岡市の静岡浅間神社で大会を開催し、さらにこれに呼応して内房村の浅間神社でも会が開かれたもので、中央では、同日すなわち十九日に奈良県の橿原神宮で大会が開かれていた。<sup>(29)</sup>大会は、「紀元二千六百年の国民的感激を籠め八紘一字の皇道精神を高揚し（中略）銃後国民の赤誠を誓う」ものであった。

日本全国で主として各市町村の銃後奉公会がそれぞれの実施を担当し、祈願祭などの後に学校等の単位で慰問品の発送にあたり、会の実施状況について前線の郷土部隊に通報することなどが中央において定められ、地域の



活動を基盤としたものになるよう配慮されており、これを前提として、橿原神宮における中央の大会との同調が分単位で図られた。<sup>(30)</sup> 大会要項は、午前九時、橿原神宮および同外苑において、秩父宮紀元二千六百年奉祝会総裁を迎えて、総裁による拝礼や内閣総理大臣、陸海軍大臣、文部大臣、厚生大臣などの玉串の奉呈と拝礼、午前一一時二〇分からの宣誓式における国旗掲揚、宮城遙拝、戦没将士の英霊への感謝および出征将士の武運長久祈願、紀元二千六百年頌歌斉唱、全員最敬礼での詔書奉読、奉祝国民歌「紀元二千六百年」斉唱などの執行を定めていた。中央の大会には、大日本青年団、産業報国連盟、大日本国防婦人会、愛国婦人会などからの二万五八七二名の参加者を地域別にみると、大会会場である奈良および近隣地域から多数の参加者があった。地元奈良は約九〇〇〇名、大阪約四五〇〇名で、三重、京都、兵庫、和歌山からの参加者はそれぞれ一〇〇〇名を越えた。一方、遠方であった東北、関東、九州地方などからの参加者は、一三八名だった東京を例外とし、それぞれ二〇名から三〇名で、静岡も三五名であった。

上に述べたように、『祝典記録』に見る限り、浅間神社にかかわって「二千六百年」の奉祝事業がおこなわれたのは、静岡、山梨の合計二一件のみであった。たとえば、日常的に富士山を望見しうる神奈川県内には、横浜市をはじめ多数の浅間神社が所在した。なかには、横須賀市津久井の通称「富士浅間」のように、比較的多数の氏子や崇敬者を擁し、「三浦富士」と呼ばれて富士講の参拝所となっていたところもあった。また、東京にも、当時、コノハナサクヤヒメを祭神とする浅間神社（富士神社）が一八社あった。<sup>(31)</sup> にもかかわらず神奈川県内や東京の浅間神社は、史料上、紀元二千六百年の奉祝事業と無縁であった。つまり、浅間神社を通じた富士山信仰と二六〇〇年の皇統への尊崇は、全国的に見れば静岡、山梨だけの極めて特殊な奉祝事業のあり方だったと言えよう。

## 三 奉祝国民歌「紀元二千六百年」の制作

語としての「富士」が紀元二千六百年を機にもっともひろく国民各層に浸透したきっかけとなったのは、おそらく奉祝国民歌「紀元二千六百年」の制作と制定である。

式典におけるいわば公式の楽曲としては「紀元二千六百年頌歌」が昭和十三年に制作され、昭和十四年ごろからその歌唱の仕方についても、周知がはかられていたが、これ以外のいわゆる奉祝歌が民間にあふれ、奉祝の意義が減じたりあるいはその妨げになることが危惧される状況となった。<sup>(32)</sup><sup>(33)</sup>

そこで国民が常時愛唱すべき奉祝歌の制定が考慮され始め、奉祝会は、昭和十四年八月、詞および曲の懸賞募集を広く国民に対しておこなった。募集の目的として、「国民の衷心よりの歓喜を歌曲に表現し、我が光輝ある国体の精華を顕揚し、国民精神の作興に資」することを挙げ、この目的に合致し、「明朗にして壮麗、行進曲に適し、かつ平易なる表現を用」たものを採用することとした。審査は、作詞審査顧問に齋藤茂吉、西條八十、北原白秋ほか三名。作曲審査顧問として山田耕筰ほか五名をおき、奉祝会および日本放送協会が審査することとされた。応募された歌詞は九月二十日の締め切りまでに一万七四八七編におよんだ。十月二十日、当選作として発表されたのが、当時の東京市板橋区の増田氏による以下のような歌詞であった。ただし増田氏の名は公表されず、紀元二千六百年奉祝会および日本放送協会制定とされた。

金鷄輝く 日本

栄ある光 身にうけて

いまこそ祝え この朝

紀元は二千六百年

あ、一億の胸はなる

歓喜あふる、この土を

しつかとわれら 踏みしめて

はるかに仰ぐ 大御言

紀元は二千六百年

あ、肇国の雲青し

荒ぶ世界に 唯一つ

ゆるがぬ御代に 生い立ちし

感謝は清き 火と燃えて

紀元は二千六百年

あ、報国の血は勇む

潮ゆたけき 海原に

桜と富士の 影織りて

世紀の文化 また新

紀元は二千六百年

あ、燦爛のこの国威

正義凜たる 旗の下

明朗アジア うち建てん

力と意気を 示せ今

紀元は二千六百年

あ、彌栄の日はのぼる

(付線——松本、以下同様)

四番の詞のなかに、「富士」語が見える。この部分を極めて自由に語を補って解釈すれば、おおよそ、豊かな海洋にめぐまれ、桜と富士山に象徴される伝統文化のもとで、また新たな文化、伝統が生まれようとする紀元二千六百年のこの時、まさに国威は燦然と輝きまた爛熟の極みに達しようとしている、とでもなるうか。奉祝会の公式賛歌と言い得る「頌歌」の歌詞には登場しない「富士」が、ここに明確に存在しているのである。

ところが、発表された歌詞は、増田氏が応募した原詞とはいくつかの異なった部分、つまり制定者、作詞審査顧

問などによって補作、改作をされたと思われる部分が少なからずあるのである。

「富士」が登場する四番の歌詞は、原詞では次のとおりである。

みどり萌えたつ 東方の

精神の園に 培いて

世紀の文化 花咲かす

使命に進め 颯爽と

皇紀二千六百年

実は、原詞には他の部分も含め、「富士」はまったく存在しない。では、原詞に対する補作として加えられた「富士」は、この楽曲の制定者のみの意向によって発表作に登場したのだろうか。

増田氏の当選作のほかに佳作として三編が選ばれている。そのうち、兵庫県の今井氏による三番まである歌詞のなかに、「富士」ないしこれに類する語はない。しかし、他の二編には、どちらにも「富士の嶺」が詠い込まれている。仙台市の鈴木氏の歌詞二番は次の如くである。

千古しづまる富士の嶺に 見よ慶びの雪映ゆる

桜 日本 華と咲く 無双の歴史うけ継ぎて

ことほぎ仰う今こゝに 皇紀二千六百年

また、福岡県の森氏による歌詞の二番にもこうある。

仰げば高き富士の嶺

千古の雪に民族の

巨き歩みの跡とめて

見よ 玲瓏と雲もなく

希望に映ゆる暁の色

この経緯からは、おそらく奉祝会など制定者が、応募作の中における「富士」の語の登場振りを勘案し、また国民の愛唱すべき楽曲であることなどに徴して、その歌詞に「富士」を登場させることについて積極的な判断をおこなったと理解することができるのではないか。

ビクターレコードから発売されたレコードのジャケットは、まさに富士山のみをモチーフにしたデザインになっており、象徴的である。<sup>(34)</sup> この時期のレコードの生産、販売と蓄音機の普及が、こうした歌曲の普及の基礎的な背景を準備したと言うから、外装と内容あいまって、この楽曲の普及に果たした富士山の位置の大きさを示していると言えよう。<sup>(35)</sup>

#### 四 植民地朝鮮における富士山

植民地における奉祝事業の中では、朝鮮において富士山に関連する事業が二件おこなわれていて、台湾では、直接富士山に関係する行事は、少なくとも『紀元二千六百年祝典記録』のなかには見出せない。

朝鮮における二件は、いづれも学校教育の場においてなされた。ひとつは、当時の大邱府慶北公立中学校でおこ

なわれた扁額の掲揚である。校友会費四一八円が支出されて、昭和十五年に、「天孫降臨」および「富士山」の大扁額二面が講堂に掲げられた。<sup>(36)</sup> もう一例は、同じ年、大邱府の大邱南山町小学校でおこなわれた「国体明徴額掲揚」である。慶北公立中学校同様、「天孫降臨」および「富士山」の扁額を講堂に掲げた。父兄の篤志寄付五〇〇円によった。<sup>(37)</sup>

これらの扁額掲揚の目的とするところは、大邱南山町小学校での行事が「国体明徴額掲揚」となっていることに端的に示されているように、朝鮮を含めた大日本帝国の国情、万世一系の天皇が統治するところであるというその一点を、植民地の被支配民族に知らしめるところにあった。ふたつの扁額のうち、「天孫降臨」は統治の主体の来源や性格を明確にし、一方、「富士山」はそうした統治のもとにある文化や自然、歴史を象徴していた。

しかし、そもそもそのような富士山の象徴性を歴史的に共有しない植民地にあつては、「富士山」を示すという方法による紀元二千六百年の意義に関する教育は、おそらく成立しなかった。史料上、富士山に関連する事業が朝鮮の二件のみにとどまるのは、そうした事情が既にして植民地支配者の側に十分に理解されていたことに起因していたものと思われる。

### むすびにかえて——何が賛美されたか

昭和十五年、紀元二千六百年の年、これを祝う活動として、奉祝会に認められたいわば公式行事以外にも、全国各地でさまざまな事業がおこなわれた。

そうしたもののひとつに、地方行政担当者が、政府の対外政策に対する協力の姿勢を確認しあう会議があった。昭和十五年のおそらく後半、東京で、「紀元二千六百年記念新東亜建設の市長、市会議長会議」と銘打って開かれたこの会議は、なにか特別な結論を議決したり、定まった要求を提起したりするのではなく、「種々新東亜建設に對する□談を重ね」るものだった。

会議に出席した稲森静岡市長は、「富士を心として」と題する意見書を提出した。意見の趣旨は、「吾等の富嶽が燦然として不動の姿勢をもつて四海を望む如く日独伊三国同盟に堅き不動の姿勢をもつて英米の老獪国□にも何ら関知せず世界新秩序に邁進せん□心構えを表示したもので」<sup>(38)</sup> あった。

ここでの富士山は、日独伊三国同盟によって開かれようとする新しい外交の局面を、右顧左眈せず頑固なまでにまっすぐに進もうという、日本の断固たる姿勢の象徴であり、そうした姿勢に對抗し、これを非難しまたこれに妨害の手を伸ばそうとするアメリカ、イギリスなどの反対勢力に對する、徹底した無視の嚴肅さの象徴でもあった。

他方、日頃、さまざま活動をを通じて、富士との関係が深かった人々も、紀元二千六百年を機に、あらためて特別な活動を、既に一定の評価を得ていたそれ以前の活動のうえに重ねている。

風景や山岳写真家として評価を得ていた岡田紅陽は、「紀元二千六百年奉祝出版」として一〇五葉の写真からなる『富士山』を、横山大観の装丁で、アルス社から刊行した。<sup>(39)</sup> 序として日本画家であり俳人でもあった川端龍子と同じく日本画家榊原紫峰が文章を寄せている。この序文で川端は、この写真集を「靈峰図」と表現し、一〇五の富士をして、我々の靈峰すなわち日本の象徴たる富士山、としている。<sup>(40)</sup>

岡田自身は、「紀元二千六百年九月」に「訓練空襲警報時の燈火の下」で書いた「自序」の中で、富士山に對し、



「私のカメラをとおしての絵であり、詞であり、音楽であり、信仰であり、そして生活でありたい」とし、さらに、「晨に旭光を浴びて巍然と聳ゆる、その偉大さと正しさ。また夕陽に泰然と暮れゆく悠久さと温厚さ。——すべて私の感謝であり、法悦でもある。じっと見詰めていると何時のまにか涙が滲んでくる。日本人に生まれた自分に、よりふさわしい自然と、より愉しい人生とを物語ってくれる訓諭の父であり、慈愛の母なのである」と述べ、「八絃一字の肇国の大理念をシンボライズする霊峰富士山を燃え立つ心で、厳肅の態度でもう一度見直したいと思う」と記す<sup>(41)</sup>。他を知らない、単に日本人として日本の富士山にしか関心が無い者のお国自慢的言辭ではない。「自序」と写真部分の間に置かれた「富士に想う」のなかで、岡田ははっきりと外国人の富士評にも言及しており<sup>(42)</sup>、既に外地台湾での本格的撮影活動の経験もあった。何という富士に対する全き信頼、否、依存！「富士山中毒」とでも言うしかないこの富士山観は、紀元二千六百年を機に、やはり、「八絃一字の肇国の大理念」を、まさに「シンボライズする」存在としての富士山に対して吐露されているのである。印画紙の上の富士山は、まさに、天皇の御真影との相似<sup>(43)</sup>を、見る者に想起させるものであった。

同年十月、作家としてまた登山家としても世に知られていた深田久彌<sup>(44)</sup>によって編纂され、五〇〇頁を超える大部な書籍として刊行された『富士山<sup>(45)</sup>』においても、さすがにいささか冷静にはあるが、岡田とほぼ同様の富士山観が示されている。同書は、「Ⅰ 概説」「Ⅱ 紀行」「Ⅲ 案内」「ⅢⅢ 随筆<sup>(46)</sup>」「Ⅴ 古典その他」の構成のもと、古代から現代にいたる富士山に関連した七二編の文章を集成したもので、さながら富士に関する資料百科の趣を持っている。

「紀元二千六百年の夏」に書かれたこの書の編集後記を、深田は次のような編纂理由を明記した一文で締めくく

っている。すなわち、「光輝あるわが民族が万葉の昔から親しみ仰いできた日本の表象富士山を、この古今未曾有の国力発展の期に、一層よく認識することに意義を感じたからである」と。<sup>(46)</sup>ここでも、富士山は富士山そのものとして尊いのではなく、「日本の表象」であるからこそ「一層よく認識」すべき対象なのである。

表象としての富士山だけでなく、自然の生み出したものとしての富士山、富士山の自然、山体そのものに関心を示した文章として、たとえば七月二十六・二十七日におこなわれた「紀元二千六百年記念富士山頂全国青年大会」に関する新聞記者のルポルタージュがある。この大会は、これを主催した『静岡新報』の複数の記者が富士に登頂する青年たちと相前後して登山し、取材したものである。記者のうち芦川某と大石森太郎が、それぞれ登頂記を複数回にわたって紙上に執筆している。

芦川の「青年団に先行して 霊峰登拝の記」は二回にわたって『静岡新報』に掲載された。<sup>(47)</sup>芦川はまず山頂登頂後の壮快感から記す。「海拔一万三千余尺の富士を足下にながめて始めて知るこの「壮快」さだ。しかし、この壮快さは厳しい自然条件と裏腹な関係にある。「霧はあとからあとと山頂を押し包んで瞬時にして陽光をさへぎさり、薄陽となる、だが霧は強風に流され□飛び、また、□々と湧出しては山頂一帯を包むと云った工合で、霧と共に冷気はひし〜と迫□記者等はジャケットを着ながらも想像以上の寒気に縮あがり、予定していた剣が峰の氣象観測所の見学も噴火口巡りも『ゴハサン』にして頂上の石室で昼食を」とった。しかし「誰もがぐちびるの色を紫色にして」おり、芦川らは「雲行を眺め、かげりゆく日射しを眺め昼食もろく〜咽喉を通らぬほどだった」。

登山の過程や山頂で出会う厳しい自然条件への言及は、三回に分けて連載された大石の登頂記においても同様である。<sup>(48)</sup>六合目あたりからの気圧の変化に、大石は深呼吸を繰り返しつつ登山し、山頂の寒気にどれほど閉口したか

を、寒さしのぎに「甘酒ばかりを呑んでも」回復しないと告白している。また、富士の自然の厳しさに関連してかれの登頂記は、一般記事が明記しなかった山頂での行事の事実関係についても真実を記している。すなわち、浅間神社を意気揚々と出発した全国の青年団員達も、山頂への到着は体力の格差によって相当な時間的ばらつきが生じた。そのため、山頂奥宮前での国威宣揚の祈願祭は、実は、三回おこなわれ、山頂に早期に到着した者は早々に下山し、また、午後二時半の山頂到着者を最後に第三回の行事をおこなったのだという。<sup>(49)</sup>

こうした富士の自然の厳しさは、これを突破して山頂にたどり着いた青年たちの活動を、感動的で荘厳なものとして認識させる背景となった。記者芦川は彼らの万歳の声が山頂から四囲に響き渡る光景を、「目頭の熱くなるのを覚え」また「理屈を抜きにして、(中略)無性に嬉しかった」と記している。

しかし、そうした感動的な富士山の存在を台無しにする現実を、富士山自身が抱えていたことを、さすがに記者達は見逃さなかった。まず、登山道に散乱するゴミの存在である。サイダー、ビールの空き瓶やそれらの破片、キヤラメルの空き箱、破れた草鞋、新聞紙、握り飯、手付かずの海苔巻弁当。記者は、霊峰富士における飲食物等の散乱を、国民的な自覚や支持がないまままで政府がいくら節約を呼びかけても結局効果を挙げ得ないことの見本だと厳しく指摘している。さらに、山小屋での登山者の不道德。破損した布団についてその理由をただした記者大石に対する山小屋関係者の答えは、登山者が防寒のために布団の一部を切り裂いて衣服の下に着込んで行ってしまふ、というのだった。富士山は、若者たちが皇国の未来永劫の繁栄を祈る聖なる場所であると同時に、その山体には霊峰という語とは似ても似つかぬ、不道德な所業の跡が刻印されている場所でもあった。

実体としての富士山の荒廃。しかし、富士山を靈性宿るところとして仰ぎ見、登拝する心性。いかにしてこのふ

たつは、「紀元二千六百年」の日本に二つながら在り得たのか。

奉祝事業の対象として、また、日常生活のなかでも、日本人にとって賛美の対象となった富士山は、自然の中の被造物である富士山そのものではなく、この山が象徴するもの、富士山が記号として表すものだった。富士山そのもの、富士山の自然は、夏山でも、山麓では意気軒昂な選りすぐりの若者達の行軍を、ばらばらに粉碎してしまうほど苛酷なものだったし、山頂にいたる登山道や途中の山小屋は、人間の手によって、とても靈性や聖域とは程遠い惨状を呈していた。「二千六百年」の奉祝行事に相応しい場所として賛美の対象となった富士山は、現にそこにある富士山、地図の上に書き表される富士山ではなく、その象徴するもの、精神のなかにこそあったのである。

その意味で、「紀元二千六百年」を祝う当時の日本人にとって、富士山は、そこに在りつつ、また、そこには無かったのである。

注

- (1) 拙稿「山梨における紀元二千六百年奉祝関係事業とその意義」『郡内近代史研究会会報』三五、二〇〇〇年九月。
- (2) 『紀元二千六百年祝典記録』第十一冊、一三五～一三六、一四六、一六六、一七〇頁。以下、奉祝事業のなかの登山一般に関連する事業に関しては、同史料による。
- (3) 佐藤弘・松本武彦「戦時国民統合の国際的契機——昭和13年のふたつの富士登山をめぐって——」『大学改革と生涯学習』六、二〇〇二年三月、九七、一〇三頁。
- (4) 「富士山の殺人的の大賑い 廿一日朝二万人突破」『山梨毎日新聞』一九四〇（昭和十五年）年七月二二日第四面。「富士は人山一万六千突破 記録的な興亜の登山」同前、第三面。
- (5) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第十一冊、一二頁。

- (6) 同前、一二―一三頁。
- (7) 同前、第九冊、三五八頁。
- (8) 読売新聞社編『紀元二千六百年讃歌』読売新聞社、一九四〇年、八、一一頁。読売新聞社100年史編集委員会編『読売新聞百年史 別冊 資料・年表』読売新聞社、一九七六年。ただし、本書では七月二日のこととしている。
- (9) 「聖火霊峰に点す」歌燈籠「奉獻祭の盛典」『読売新聞』七月二七日第三面。「神速四時間半で 聖火山頂へ 霊峰に 歌燈籠」点火」同七月二七日夕刊第二面。これらの記事は、歌燈籠の竣工を七月二六日としている。
- (10) 「霊峰の山頂で けさ竣工式」歌燈籠「へ南北両部隊」同前、七月二六日第七面。
- (11) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第九冊、三五八頁。
- (12) 同前、第十一冊、九頁。同、第十二冊、五一―五三頁。
- (13) 「けさ 二千六百年を記念し 全国青年大会開催」『静岡新報』七月二七日夕刊第一面。
- (14) 「式に続いて講演会 四王天中将の熱弁」同前、七月二七日第一面。四王天延孝。群馬県出身。陸士一二期。工兵少尉、近衛工兵大隊付。明治四十二年陸大卒、関東都督府陸軍参謀。大正十三年国際連盟陸軍代表、十四年兼同空軍代表をへて、昭和四年中将で予備役編入。二・二六事件に関係したとの嫌疑を受ける。ユタヤ問題の専門家でもあった。昭和三十七年没。秦郁彦編『日本陸海軍総合事典(第2版)』東京大学出版会、二〇〇五年、七六頁。四王天延孝『四王天延孝回想録』みすず書房、一九六四年。
- (15) 「小浜知事訓示」『静岡新報』七月二七日第一面。
- (16) 「奥の宮社頭に額き 国威宣揚を祈願」同前、七月二八日夕刊第一面。
- (17) 「富士山頂青年大会 行事滞りなく終了 山頂で解散下山の途につく」同前、七月二八日第一面。
- (18) 同前、七月二七日第三面。同前、七月二七日夕刊第二面、第三面。同前、七月二八日夕刊第三面。
- (19) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第十一冊、九頁。
- (20) 「富士から和田海岸へ 七十二キロ一飛び」『山梨毎日新聞』八月一七日第二面。「飛んだり七十二キロ 栄冠小田滑空士に」『山梨民報』八月一七日第二面。
- (21) 「グライダー学校 玉幡空の威容新体制」『山梨毎日新聞』九月一日第三面。

- (22) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第九冊、三五二頁。
- (23) 「守護神祠鎮座式」「少年団研究」一八一、一九四一年一月、三二頁。
- (24) 同前、三七頁。
- (25) 浅間神社社務所編、井野辺茂雄『富士の研究Ⅲ 富士の信仰』名著出版、一九七三年（再版）。遠藤秀男『富士山信仰の発生と浅間信仰の成立』平野栄次編『富士浅間信仰』雄山閣出版、一九八七年、等参照。
- (26) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第十一冊、一五頁。
- (27) 同前、第九冊、六八七頁。同、第十二冊、五〇六、五〇七、五一一、五一三、五三一、五三七、五四五頁。以下、浅間神社に  
関係するものについては、同史料による。
- (28) 同前、第十一冊、一六頁。
- (29) 「聖地の式典に呼応し 統後奉公祈誓大会 けさ静岡浅間神社に於いて」『静岡新報』六月二〇日夕刊第一面。
- (30) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第十一冊、四八五～五九七頁。以下、「統後奉公祈誓大会」については、同史料による。
- (31) 神奈川県神社庁編『神奈川県神社誌』神奈川県神社庁、一九八一年。東京都神社庁編『東京都神社名鑑』東京都神社庁、一九  
八六年、参照。
- (32) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第八冊、六五九～六七三頁。
- (33) 同前、六七三～七一九頁。以下、「奉祝国民歌『紀元二千六百年』」に関しては、同史料による。
- (34) ケネス・J・ルオフ（木村剛久 訳）『紀元二千六百年 消費と観光のナショナルリズム』朝日新聞出版、二〇一〇年、口絵八。
- (35) 同前、一一八～一九頁。
- (36) 前掲『紀元二千六百年祝典記録』第十冊、四九六～四九七頁。
- (37) 同前、五〇〇頁。
- (38) 「新東亜建設に 富士を心として邁進 稲森市長から大会へ」『静岡新報』一月二二日第一面。
- (39) 岡田紅陽『富士山』アルス、一九四〇年。岡田はこれ以前の一九三四年に『国立公園十二勝』を報知新聞社から、また、『台湾  
国立公園写真集』を一九三九年に台湾国立公園協会から刊行していた。
- (40) 川端龍子「聖紀と霊峰」同前『富士山』二頁。

- (41) 岡田「自序」同前、四～五頁。
- (42) 岡田「富士に想う」同前、七～八頁。
- (43) 金子隆一「富士写真」の転移——富士山はどのように写されてきたか」『国文学』四九―二、二〇〇四年二月、七六頁。
- (44) 深田は、一九二九年、横光利一、川端康成などと雑誌『文学』を創刊。翌年には小林秀雄、井伏鱒二らの雑誌『作品』の同人ともなっている。また、一九三五年には日本山岳協会に入会し、一九三四年、改造社より『わが山山』、一九三七年に三省堂から『山岳展望』を刊行。一九四〇年当時は、後年とは別の戦時下の構想で、「日本百名山」のシリーズを開始し、第一回として「高千穂峰」を『山小屋』九八号（一九四〇年三月）に執筆している。近藤信行「深田久彌 その山と文学」平凡社、二〇一一年、九～三八頁。堀込静香編『人物書誌体系14 深田久弥』日外アソシエーツ、一九八六年。
- (45) 深田久彌編『富士山』青木書店、一九四〇年。
- (46) 同前、五〇三頁。
- (47) 菅沢生「青年団に先行して 霊峰登拝の記」『静岡新報』七月三〇日第二面。同「青年団に先行して 霊峰登拝の記（二）」同前、七月三一日第二面。
- (48) 大石森太郎「富士山頂全国青年大会 参加登山感想記（1）」同前、七月三一日夕刊第一面。同「富士山頂全国青年大会 参加登山感想記（2）」同前、八月一日夕刊第一面。同「富士山頂全国青年大会 参加登山感想記（3）」同前、八月二日夕刊第一面。
- (49) 同前「富士山頂全国青年大会 参加登山感想記（3）」。